

Japan's industrialization in the world economy 1859-1899:

Export trade and overseas competition

——杉山 伸也

書 評

経済史研究に新世代

村上 泰亮

杉山氏の今回の受賞作は、19世紀後半における日本の産業化を国際経済の動きの中で見直し、とくに日本の離陸を支えた輸出産業の生糸、茶、石炭について綿密な記述を与えたものである。記述は明快で、論議は思いがけない刺激に富み、経済史研究の新世代の登場を告知させる魅力をもつ。ロンドン大学へ提出の学位論文に基づいて書かれているが、一般読者にも英語の壁に挑戦して一読することを勧めたい好著である。

かつて日本の産業化の説明モデルとしては、欧米列強の圧力が、明治維新という政治変革を余儀なくさせ、徳川時代とは不連続な新しい社会が政府主導の下で作られていったとする議論が有力だった。

杉山氏は、マルクス主義理論、「自由貿易の帝国主義」の理論、従属理論などにその例を見出し、政治要因中心論、受動的反応説、不連続説としてこの種のモデルを批判する。もっとも日本国内の経済分析の面では、既に日本の数量経済史家の努力によってこれらのモデルに対する批判が略定着している。すなわち、徳川時代においてもすでに、農村工業や流通・金融の仕組みを中心として国内に産業化が胎動しており、経済的には徳川社会は明治以降の社会を用意していたという証拠が示されてきた。

杉山氏はこの議論の線に沿いながら、しかし国際的な視点に欠ける点があったとして、批判を深めようとする。たとえば、1860年代以降のイギリスは政府支出の削減に努めており、そのチャイナスクワドロンの（支那派遣艦隊）は条約

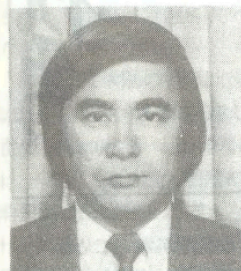
港における英国の権益を守るのに精一杯で、東アジアの植民地化に乗り出す余裕などなかった。薩摩や長州砲撃の作り出した日本植民地化の脅威は実は幻であった。実際に事態を変えたのは、むしろ1859年の開国以降、日本に押し寄せた世界市場の力であり、1868年の「明治維新」よりもむしろ1859年の開国に注目すべきだ。このように論じる杉山氏の指摘は鋭い。

このことを裏付けるために、杉山氏は、生糸、茶、石炭の3つの産業が驚くほど短期間にそしてダイナミックに輸出に成功したという事実を綿密に説明してみせる。ジャーディン・マセソン商会内部の通信文書、外国領事の報告、当時の新聞記事を駆使する説明は、読者を魅了する。

当時のいわゆる「不平等条約」がかえって外国商社の国内進出への非関税障壁となったという指摘も面白い。日本の生産者たちが市場に対して精力的にそして時に愚かに反応する有り様、国外需要が、蚕の病気、飲料嗜好の変化、蒸気船の登場によって変化していく姿が描かれ、歴史的幸運の働きもそこに暗示される。

この本では、古き良き歴史学の手法に基づく個別産業の分析が、大胆な仮説の提示と結びつき、日本側の問題点も冷静に描かれる。外国で十分に学び、もはや肩肘を張らずに自国の過去を語る世代の歴史家がついに登場してきたのであろう。この気鋭の筆者には、輸入代替産業との関連、20世紀との繋がりなどを含む次の大きな著作を是非期待したい。

(The Athlone Press 304ページ 12,750円)



すぎやま しんや

昭和47年早稲田大学政治経済学部卒業。50年同大学院経済学研究科修士課程修了、56年ロンドン大学より博士号取得。ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス専任研究員などを経て、59年慶應義塾大学経済学部助教授。主な著書、論文に『徳川社会からの展望—発展・構造・国際関係』（共編著、同文館出版、平成元年）、「国際環境と外国貿易」（『日本経済史』第3巻、岩波書店、平成元年）。

昭和24年静岡県生まれ。

受賞のことば

近代日本の国際競争に新視点

今回、日経・経済図書文化賞をいただき非常に嬉しく思います。本書がこれまでの研究の一つの結晶であり、かつ最初の著書であるだけに一層その感を強くします。本書で考えてみたかったことは、日本が、いわゆる「不平等」条約下におかれていた1859～99年という時期に、工業化を進展させることができたのは何故なのか、という問題でした。それを当時の主要な輸出産業（生糸・茶・石炭）に焦点をあてて、国際競争力という視点から考えてみました。

日本経済史を専攻しながらイギリスで日本研究をするということは一見逆説的に思えるかも知れませんが、その動機は、日本の資料だけではなく、海外の日本関係資料も利用して、近代日本を国際経済関係史とでもいうべき広角の史的パースペクティブの中で考えてみたいという気持を強くもっていたことでした。70年代後半から80年代前半にかけて約7年弱にわたりイギリスで生活し、その間に、日欧貿易摩擦や日本の国際競争力や日本市場の閉鎖性などについて多くを考えさせられましたし、また距離をおいた地点から日本をある程度相対化して見る眼を養うことができたようにも思えます。

本書では、主にパブリック・レコード・オフィス（国立公文書館）のイギリス外務省・植民地省・海軍省資料やケンブリッジ大学図書館のジャーディン・マセソン商会資料などを利用して、多くの時間はこうした資料の収集にあてられましたが、膨大な量にのぼるノートやコピーのわりに実際に利用できたのは限られた部分にしかすぎませんでした。

資料収集をしながら、一方で一次資料から歴史像を再構成していくという歴史のおもしろさを感じるとともに、他方では無駄なことをしているといく度となく疑問に感じることもありました。また研究のためには、日本のことだけではなく、世界の他の諸地域の経済史や政治・外交史も等しく勉強しなければならぬと痛感するにつれて、気の重くなることもありましたが、しかし、今回の受賞でそうしたことが決して無為でなかったことを知るとともに、この受賞を一つの糧にして、今後の研究を進展させていきたいと思っております。